
アナタノオト

翠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アナタノオト

【Nコード】

N3758M

【作者名】

翠

【あらすじ】

【アルト×シェリル】ブレラとシェリルのその後。おまけにはラ
ンカも。

拍手おまけ話あり

小さな電子音が鳴り扉が滑るように開くと、甘い香りと共にこの部屋の主が帰ってきた。

ふわふわの綿菓子のようなストロベリーブロンドは肩口で三つ編みに結われ、淡いピンクのサテンのリボンと白いレースのリボンで飾られている。

シェリルは持っていた花束とケーキをキッチンテーブルに置くと、続けて入ってきた青年に優しく声をかけた。

「ブレラ、大丈夫？ ごめんなさい。思った以上に買い込んでしまつて……」

「大丈夫だ、問題ない」

「今、お茶を入れるわね。座って待ってて」

両手にあふれんばかりの荷物を抱えて、しかし涼しい顔をした青年は宝石のような紫色の瞳をシェリルに向けると、眉間にしわを刻んだ。

「まで。動くな」

「え？ きやつ」

シェリルは何が起こったかを把握する前に、ブレラの腕の中に包み込まれていた。

「気をつける。ただでさえ足下が見えにくくなっているんだ」

「あ、ありがとう。お掃除ロボットに躓いたのね」

シェリルの大きなお腹越しに見える床には、シェリルが蹴倒してしまったお掃除ロボットと、ブレラが放り出した荷物が転がっていた。

「ブレラ……」

「問題ない。ワレモノはそつと置いた」

この惨状を、なんでもなしのように言うブレラに、シェリルは笑みがこぼれた。

「そつ、ならいいわ。さあ、ナイトさん。私をお茶を煎れられるようにキッチンまで連れて行って」

ブレラはシェリルを抱きかかえると、そつとリビングのソファに座らせた。

「ブレラ？」

「座っている。俺が煎れる」

「でも……」

「無理をするとお腹が張ってくるぞ。お前は少し疲れているようだ、言う事を聞いておけ」

「チエックしたの？」

「いや……カンだ」

「ありがとう。それなら、休ませてもらうわ」

大きなお腹に優しく手をあて撫でながらシェリルは、ブレラが荷物を片付けたりお茶を煎れたりしている様子を見ていた。

「ねえ、アナタ。アナタには生まれてくる前から、とってもステキなナイトがついているのよ。彼なら、ずっと……アナタを守ってく

れるわ。だからまずは、無事に生まれて来なさい」

それに答えたかのように、シェリルのお腹の中で赤ちゃんは動いた。

「あ」

「どうした？」

ティーポットを持って怪訝そうな顔をするブレラ。その姿に何も言えない笑いがこぼれそうになるのを堪えながら、シェリルは手招きした。

「なんだ？」

「動いたのよ」

「何が」

「赤ちゃんが」

ブレラはさらに怪訝そうな顔をする。

「う、動くのか……？」

「ええ、もうだいぶ大きくなっているもの」

「バジユラの幼体が成体になるところしか想像できない」

「……………そ、それはちょっと……………想像したくないわ」

つわりもおさまり、最近では気分良く過ごしていたが、昔見たエイリアンものの映画などを思い出してシェリルは気持ちが悪くなり口元を押さえた。

「す、すまん」

「いえ……大丈夫よ。ねえ、お腹に手を当ててみて。話しかけてみて？」

「は、話しかけるのか？ 何を？」

「それぐらい自分で考えなさい」

ブレラは恐る恐るシェリルの大きなお腹に手を伸ばす。これ以上はないというほど、優しく、力を入れず、慎重に手をおいた。それに反応したかのように赤ちゃんが動く。お腹の中から突き上げる振動にびっくりしたブレラはとっさに手を離した。

「おい。突き破って出てこないだろうな」

「だから、やめてってばその発想！」

「しかし……」

「んもう！ 今日は機嫌がいいのよ。すごく動いているもの。耳をあててごらんならい。命の音がするわよ」

「命の、音……」

珍しく怯えたような表情をしながら、ブレラは膝まずき、シェリルのお腹にそっと耳を当てた。

ドクン。ドクン。

リズムカルに、たまに蹴りやパンチの音も加わりながら、ブレラの頭に響く。音。

「いのちのおと……」

シエリルはブレラの頭を優しく撫でながら、微笑んだ。

「ねえ、ブレラ。あなたやランカちゃんのお母様も、こうしてあなたが生まれてくるのを楽しみにしていたのね。命の音が途切れませんように。無事に生まれて来ますように。生まれたら今度は、無事に育ちますように。ケガをしませんように。病気になりませんように。幸せでありますように……。親はいくらでも望みが出てくるのね、贅沢ね、参ったわ。でも、それほど愛しているの。あなたも愛されていたの。今でもずっと」

「ああ……そうだな、シエリル」

命の音を聴きながら、ブレラは瞳を閉じて優しくった、温かかった母のことを思い出す。

「お母様だけでなく、私やランカちゃんもあなたのこと心配しているのよ。私のボディーガードなんかして、たまに違う任務もこなしているようだし……。あなたはこの子のお守りもしなきゃいけないのよ、怪我なんてしてられないんですからね」

フツ。とブレラは優しく微笑んだ。

「わかっている」

心地よいリズムと温かいぬくもりにいつしかブレラは眠りに落ちていた。遠くでシェリルの歌声が聴こえる。

アナタノオト ドクン ドクン ドクン ドクン

聴こえてくるよ ドクン ドクン ドクン

生きてる音 やさしい音 だから切ない音 聴こえてくるよ

眠ってしまったブレラにシェリルはブランケットをかけ、ブレラが運んで来てくれていた紅茶に手を伸ばす。

「長旅から疲れて帰ってきたダンナに、どういう場面を見せるんだ、

「お前は」

「あら、アルト帰ってたの。おかえりなさい」

荷物を預けてくれればいいのに、自分で持って帰って来ているうえに、軽く息を切らしているところを見ると、フロンティアに着くなり急いで帰ってきてくれたのだろう。シェリルは愛しさがこみ上げてきて、紅茶を置くと、とびきりの笑顔でアルトに両腕を伸ばす。アルトは少々不機嫌ながらも、ソファ越しにシェリルを抱きしめておでこに口づけた。

「ただいま」

自然とアルトの視線は、自分の妻のお腹に抱きつく姿勢で寝ているブレラに向かう。その視線の意味を知ってか知らずか、シェリルはシツと口元に人差し指を持って来て「疲れているの。起きるまでおいておいてあげて」と言った。

「お前なあ……」

「あら、妬いてるの？」

「べつ、別に」

シェリルは真っ赤になってそっぽを向くアルトを見て吹き出した。出逢った頃と変わらない。思いが通じ、夫婦となり、二人の子どもが授かった今でも。

「バカね。ブレラは私にとって大切な家族よ。グレイスと同じくらい愛しているわ。でも、私にとってのイチバンは、アルトとこの子

なの、解っているでしょう？」

アルトの鼻をきゅつと軽くつまんでこちらを向かせる。アルトはバツが悪そうに視線をさ迷わせたあと、諦めたようにため息をついて「そうだな」とシエリルを抱きよせ、久しぶりに味わう柔らかな温もりと甘い香りに酔いしれた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3758m/>

アナタノオト

2010年10月10日14時05分発行